

[人物表現の流れ展によせて]

国宝「婦女遊楽図屏風」(松浦屏風)について

大和文華館に所蔵される美術品のうち、もっとも有名なのは国宝『婦女遊楽図屏風』でしょう。この屏風はかつて九州平戸の大名松浦家の所有でありましたので、「松浦屏風」の名で知られています。この屏風は彦根の井伊家に所蔵される「彦根屏風」とともに、日本近世初期風俗画の代表的作品として高く評価されています。

一般に近世初期風俗画では、室町末や桃山時代にさかのぼる古い遺品ほど、野外の祭礼や遊楽を背景として登場人物が数多く、しかも一つ一つの人物が小さく表わされるのが普通です。ところが、江戸時代に入って室内における遊楽の情景が表わされるようになると、登場人物の数が少なくなり、一つ一つの人物が大型化する傾向が認められます。「彦根屏風」もその一例ですが、「松浦屏風」のようにほぼ等身大の人物による群像描写は、他の風俗画の遺品にほとんどその例を見ません。

この屏風に表わされた総数18人の婦女は、あるいは立ちあるいは坐して、金地を背景に壮大な人体美を示しています。かつて、日本美術における人体表現は概して低調で、仏像を中心としてその特殊な例が見られるに過ぎませんでし

たが、近世初期風俗画の「松浦屏風」に至って、その欠がやや補われたと言えるかも知れません。

しかし、「松浦屏風」の画家は人物の表情の変化はあまり表現していません。また、その群像描写も六曲屏風一対の大画面としての統一には欠けるものがあり、人体の立体性は表わされず、シルエットとしての表現になっています。

これに対して、衣裳のかたちや模様的美しさは細い筆づかいと極彩色とをもって、驚くほど精密に写されています。この屏風では、伝統的な漢画の琴棋書画図の構想をかりて、三味線、双六盤、筆と硯、南蛮カルタなどを配し、ロザリオ、キセル、西洋型の鉢などの南蛮渡来の品々も描かれています。風俗描写よりもむしろ流行衣裳の陳列といった雰囲気強く感じられます。そこで、この屏風に染織の図案家あるいは工匠の手になるものとして、一種の誰が袖屏風と見る説があります。

「松浦屏風」を誰が袖屏風の一つと見ることは、この屏風に人体美の芸術と見る意見と矛盾するようですが、「松浦屏風」に衣裳美の要素が濃いことは、否定できません。とにかく、この屏風の作者はおそらく狩野派とか土佐派とか

の正系画派の出身ではなく、都市の絵屋のような在野の画家でしょう。そして、「松浦屏風」に展開されている華やかな群像と衣裳の描写は、むしろ正系画派の範囲の外にあって、眼前の風俗美に率直に感動した在野画家の手によって、はじめて達成されたものと思われます。そこで、「松浦屏風」には伝統の束縛を脱した近世の旺盛な創造力が発揮されており、しかも後には庶民芸術の浮世絵となって花を開く若々しい潜在力が秘められていると言うことができましよう。

先ほど、「松浦屏風」の制作年代を江戸時代に下るものと書きました。一体、この屏風の制作年代に関しては諸説があり、桃山時代まで上げる意見や江戸中期まで下げる見解があります。一般に、染織史の方面では、この屏風に描かれた婦人の衣裳は、ほぼ江戸時代前期の風俗を示すものと考えられています。しかし、風俗画というものは必ずしも同時代の衣裳だけをとりあげるのではなく、過去の流行衣裳を描写する場合もありますから、衣裳の形態や文様は年代決定の絶対的な資料とはなり得ません。一方、絵画史の方面では人物の描写法と金地空間の処理法の点から見て、江戸時代の寛永年間(1624～1644)の制作と見る説が有力です。この屏風の制作年代に関してはなお慎重に考察されなければなりません。江戸時代前期(17世紀)の作品と考えて、大きな誤りはありません。



同 右隻 第一扇(部分)

はじめに書きましたように、「松浦屏風」ほど大型の人物を表わした例は、日本近世初期風俗画の中にほとんど見当りません。いな、それ以前の日本絵画の中にもその例がないと言ってよいでしょう。だから、「松浦屏風」は余程特殊な作品です。そこで、人物描写がやや平板で、全体としての群像的表現に緊密性がなく、しかも衣裳美に重点が置かれているとしても、この屏風はやはり日本美術における人物表現の歴史の上で、重要な地位を占めています。この屏風は人物の立体的表現を見ることができず、シルエットとしてのおもしろきに留まっているとしても、日本美術において人体美の表現を論ずるとき、必ずとりあげねばならない作品でしょう。(成瀬不二雄)

● 婦女遊楽図屏風(松浦屏風) 左隻



同 右隻

